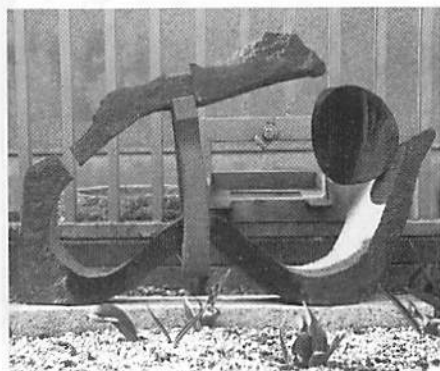


石の目。



（写真）いずれも月の周期・月齢を表現。素材は全品、黒御影石。人の意識や認識を超えたところにある。人間にはわからない月の満ち欠けを現している。別々のパーツを寄せたように見える作品もあるが、すべてひとつの石から彫りだしている。

「原石をじつとみつめていると、
どういうわけか、

この石！とひらめくときがあるのですよ。

それはもう説明しようのない感覚なのですが、

あえて云えば石が私に語りかけてくる、

そんな感じなんですわ」

彫刻家

〔KAORU ETOH〕

江藤

薫

石には「目」がある。
その目に沿って石鑿を叩いてやれば石はおもしろいほど簡単に割れる。どんなに硬い石にも、どんな種類の石にも、この「目」はかならず存在するといわれている。

「そう、ぱっと見たところではわかりませぬ。私も石を軽く鑿で叩いてみてわかることの方が多いんです。そのとき、ある感触」がありましてね。それでこれが石の目だな、と。その方向へ鑿をすすめると、どんと彫れていくんですよ」

江藤薫氏は兵庫県出身。京都教育大学美術科を卒業後、さらに京都市芸術大学彫刻専攻科を修了。京都児童美術研究所の主任を勤めながら石を素材に創作をつづける彫刻家だ。

そのむかし、城の城壁などを造る際には、そうした石の目を熟知した石工がたくさん集められたという。彼等は巨大な石に小さな鑿と槌ひとつでとりつき、瞬間にそれを四角い石材へと変えていった。そのあまりの手際よさは、感嘆したひとりの侍を石工のもとに修業させ、後に石の目に矢を放ち「石を

矢で割る」逸話のもととなったほどだ。氏はこれまでプラスチックや鉄、木とさまざまな素材と出会ってきた。その中で石に魅せられた動機を、

「木にも同じことが云えるとは思いますが、彫りだしていく、というところには石のおもしろさがあるのです」と語る。

ミケランジェロは、「石を目の前にしたとき、私にはその石に埋もれている彫像がすでに見えている。だから私は彫刻をして像をつくりだすのではない。ただ、石の中に埋もれた

ものを彫りだしているだけなのだ」と云うような言葉を語ったと、どこかで読んだことがある。巨大な大理石を前に、かの大天才はきつとその表面にある無数の石の目を読み取っていたのではないだろうか。あたかも大地に埋もれた金の鉱脈をみつけたときのように、石の目に埋もれたタビデやヒエタの輪郭が、彼の瞳には映っていたのかも知れない。

PROFILE

1955年生まれ。兵庫県西宮市出身。京都教育大学美術科を卒業後、京都市芸術大学彫刻専攻科修了。1976年、第29回京展へ出品して以来、数々の展覧会に出品。また京都を中心に個展も活発に行なう。香川県での「石のさとフェスティバル」をはじめ、受賞・入賞作品も多数。近年の代表作は関西学術研究所・住友金属研究所モニュメント「環」。



つめているとどういふ訳か、「この石！」とひらめくときがあるのです。それはもう説明しようのない感覚なのですが、あえて云えば石が私に語りかけてくる、そんな感じなんですわ」

素材となる石は建材屋さんから仕入れる。関ヶ原方面までトラックで出掛けて、じつと石を眺め、運んで帰る。石は黒の御影石が気に入っている。しかし同じ黒御影石でも、その表情、顔つきは千差万別だという。選んだ石の個性をどれだけうまく引き出すことができるか、それも氏にとっては重要な課題だ。

「創作のパターンは、概ね二つの方法にわかれます。ひとつは石の持ち味を

そのままイメージして彫りすすめてゆく方法。最終的なカタチは彫りながらわかっていく、みたいなところもあります。二つめは、特定のテーマを定めて創る方法。石に埋もれているテーマを「彫りだして」、という意味では、彫刻家らしい醍醐味のあるスタイルかも知れませぬね」

テーマを定め、ラフスケッチを描いて作業をすすめていても、当初の予定とは違うカタチに出来上がってゆくこともよくあるという。磨き込んだ表面や、鑿で削った断面を眺め、触れてゆく間に、今まで気付かなかった石の音が聞こえはじめる。

「創っている当人でさえ、石がもつ

いろいろな感触に呼び覚まされていくわけです。ですからそれを見る人には、ぜひ、実際に作品に触っていただきたいです。これは自分自身の反省も込めていつも考えていることなのですが、作家が構えず、作家のためだけにない展覧会を開きたいと思っています。

近所のおじさんやおばさん、子どもたちがプラッとして来てくれる。そして、ツルツルしたところ、ザラザラしたところを触ってみる。私が創作の途中で感じたと同じ感覚を、そのとき訪れた人も共有するわけです。創った側と見た側が「同じ感覚」を共有できるなんて、すばらしいじゃないですか」

氏は児童美術研究所で、子どもたちに絵画や粘土での美術教育を行なっている。

「子どもたちの感覚には、ほんとうに脱帽してしまふ。無意識のデフォルメはすばらしい。我々はかつて自分自身にもあった二十年、三十年前のそうした感覚をふたたび彫りだそうとしているだけなのかも知れない。近頃、そんな錯覚に陥ることもあります」

取材も終わる頃、氏はそう語ると、すっきり冷めてしまった珈琲を口元に運んだ。

文・三村 溪
写真・大田 メグミ